モームの随筆 “Looking Back” について

(On “Looking Back,” an essay by W. S. Maugham)

小金丸　政　雄

はしがき

William Somerset Maugham の随筆は，その大部分がわが国においてもすでに論評または翻訳されていて，特に The Summing Up; A Writer's Notebook などは多くの読者によってすでに愛読されている。しかし彼の晩年に書かれた随筆 “Looking Back” は従来ほとんど紹介あるいは論評されていないように見受けられる。それはおそらくこの随筆がアメリカの月刊雑誌に掲載されたもので，書物として出版されていないためであろうと推察する。

筆者は最近この随筆を読了する機会を得て，これが彼の他の作品研究に非常に参考になるものと感じたので，以下これを要約，論述することにする。

この随筆は他の essays と違って，Maugham の晩年の最後の随筆で，彼自身の極めて内輪的な内密な身辺事情を含んでいる，言わば自伝的回顧録で比較的軽い読み物として，英国内においてでなく，アメリカの美術雑誌に連載されたもので一冊の書物として発行されたものではない。従ってこの資料は入手困難である。

文体は Maugham 独特の平易明快な文章であり，読み易く，その内容は例えば The Summing Up; A Writer's Notebook などにおいて述べられたことと多少重複するものも含まれているが，それがこの随筆では一層詳細に述べてあり，また他の随筆では省略され，云い残されたこと，例えば彼の妻との結婚，離婚の打ち明け話，“Cakes and Ale” その他の作品のモデルになった人物のこと，　交友関係など極めて有益な参考資料を含んでいる。

さて “Looking Back” は Part Ⅰ，Part Ⅱ および Part Ⅲ に分れているが，ここでは重点を Part Ⅰ におき，Part Ⅱ および Part Ⅲ については大略を述べるにとめる。

(原文は Part Ⅰ，Part Ⅱ，Part Ⅲ の各部とも話の一段落毎に空白を設けてあるが Chapter 1，Chapter 2 などの名称により区別されてはいない。しかしここでは説明の便宜上 Chapter 1，Chapter 2 などに区分し，なお各 Chapter をさらに (1)(2)

(3) などの小節に区分して要旨を述べることにした。)

ちなみに，この随筆は，詳しく云えば，アメリカの雑誌 Show (The Magazine of the Arts) の1962年6月，7月，8月号に連載されたものであり，モームは1965年91才の高齢で死去しているので，実に彼の逝去の数年前に書かれたものであることを参考のため，ここに付記しておきたい。

Part I

(Love and art, travel, and the friendship of the great—revelations of a personal life that heretofore has been spoken of only under the cloak of fiction are included in this "last work" by the great British author)

上記の副題が示すように Part I (第一部) には，愛，芸術，旅行，友情など——従来小説の仮面の下にのみ語られた個人生活の打ち明け話が含まれている。

Chapter 1

(1) 冒頭 Chamfort (1741—1794) (フランスの作家) の作品 "Anecdotes et Bons Mots" (小話としゃれ) の中にある笑話を引き合いに出し，その話と全様に，習慣というものはおそろしいもので，自分は毎朝書くのが習慣だったから，最後の書物 (随筆 Points of View, 1958年発行) を書き終えたので，これから何もすることがなくなり毎朝どうすごしてよいか分らないという。

参考のため，その原文をここに添えておく。

(原文) Chamfort in his "Anecdotes et Bons Mots" tells the story of a man who for thirty years had been in the habit of passing his evenings with a mistress, and on his wife's death was urged by his friends to marry her. "But if I did," he said, "I wouldn't know any more where to spend my evenings." I am in a similar, though less romantic, a pass. For as long as I can remember, except when on a journey, I have spent my mornings at my writing table. Now that I have written my last book I ask myself how I am to pass my mornings.

(2) Lambeth のスラム街を取扱った小説 (彼の処女作 Liza of Lambeth をさす) を書くことによって文筆生活に入った。そして Bermondsey のスラム街をこれにとり入れた一種のスラム小説をもくろんだ。幸い，旧友であり秘書である Alan Searle は，かってテムズ河の南側の貧困な少年のクラブを経営していたので，彼を通じて，その地区の多くの住民のことをある程度知ることができた。

彼らの生活は実にひどい状況であった。しかしみじめな状態にあった人々が反面非常に楽天的な面があり，そこに彼らの救いがあったことなど。(この部分にはこ

こに述べるのをはばかるような描写もふくまれている)

(3) そのうちに，自分のもくろんだ小説の創作に必要なすべての資料がかなり得られた，語ろうとする物語は，その詳細が心にはっきりしてきた。その作品にあらわれる創造の人物も自分のものになってきた。書き初める以外は何もすることがなかった。秋の初めにいよいよ着手することにきめた。1939年のことであった。

第二次世界大戦ぼっ発。—他になすべき仕事があった（情報活動）—そのため小説を書くことを一時中絶，戦争が終ってから筆をそることにする。—戦争が終り再び Bermondsey に行って見る。町の様相は一変していた。

自分の知っていた状態はもはや存在せず，語りたいと思った話は本当らしくひびかないし，書いても焦点がないことになった。それで自分が最初もくろんだ小説を書くのをやめた。その種のものは，つまり，未完成のままになっていると彼は云う。

(4) （ここでは，この随筆を書くにいたった動機を次のように述べている）

（原文） In my early youth I wrote, as Chekhov said he did, like a bird, but as I grew older I wrote ever less and less easily. I have had to write, rewrite and write again and in the end left the script as it was because I could do no better. But for all its difficulties I have enjoyed writing. I have never been so happy or so much at my ease as when, seated at my table, from my pen word followed word till the luncheon gong forced me to put an end to the day's work. Time passed and I made up my mind to write one more book and then write no more. It was to be a haphazard collection of essays and I proposed to call it “Points of View.” I knew very well that such a book would be forgotten as the thousands and thousands of books that are published every year are forgotten. I did not care. I enjoyed writing it. When I finished correcting the proofs I heaved a sigh of relief. I felt a delicious sense of freedom. But alas, such is the force of habit that soon I began to miss my happy morings at my writing table and presently it occurred to me that there were a good many things that I would have liked to say, but had left unsaid-a page, for instance, that I had written and torn up because it did not fit the context; stories I had told to amuse people who were staying with me; passages of autobiography that I had never had occasion to relate; portraits of persons I had known; thoughts that for one reason or another I had found it better to keep to myself. It seemed to me that I had plenty of things to write about that it would amuse me to write. I set to work again.

（訳） 私の若い頃はチェホフの云っているように，いそいそと書いた。しかし年

をとるにつれて気楽に書けなくなってきた。私はまず書き，それから書きなおし，また書くという始末で結局原稿をもとのままにしておく，それ以上によく書けないから。でも書くのがそれほど難しいにもかかわらず私は書くことを楽しんだ。テーブルに向って坐り私のペンから言葉が次々に出てきて，ついに昼食のドラが鳴り私の一日の仕事を終る時ほど楽しく気楽になれることはなかった。

時は過ぎ，私はもう一冊書いて，それ以上は書かない決心をした。それはとりとめもない随筆集であった。そして私はそれを“Points of View”(種々の見地)と呼ぶことにした。毎年出版される無数の書物が忘れられるように，そのような本が忘れ去られることはよく知っていたが，私は気にかけなかった。私は書くことを楽しんだ。私が校正刷を訂正し終った時には，あんどのため息をついた。私は何とも云えない自由な気持になった。しかし習慣の力というものは，たいしたもので，間もなく私は書き物用のテーブル（writing table）に向う楽しい朝がなくなって淋しく感じはじめた。そして，やがて言いたくて言い残したことが，まだ沢山あることが，ふと心に浮かんだ。一例えば，一度書いて，それが文脈にぴったり適しなかったために破りすてた一頁；私と一緒に滞在していた人々を楽しませるために話した話；私が述べる機会のなかった自叙伝の数節；私の知っている人々のあざやかな人物描写；あれやこれやの理由で私だけのものにしておいたがよいと思った考えなど。とにかく書くことがまだたくさんあって，それを書くのが楽しいように思われた。こうして私は再び筆をとった。

（㊟ この随筆は下線をほどこした部分の項目について，そこはかとなく，思い出すままに書かれたものである）

Chapter 2

(1)（この部分では，まず老人の心境を淡々と次のように述べている。）

（原文） I am dying. I do not mean by this statement that I expect to die tomorrow, or the day after, next week, next month or next year; though I know that I may do so on any of these occasions. At my time of life a cold may turn into pneumonia, an exertion may hring on a heart attack, a head-on crash with another car may kill me outright. Some years ago I happened upon an acturial table drawn up for an insurance company in which was given a statistical list of the probable duration of life at certain ages. I was then eighty and could, I discovered, expect to live for five years and nine months more. At the time I write this five years and three months have gone by so that, barring accidents, I can count on six months more.

Normally, dying is a slow business and a dull one. The body is a machine and it wears out as naturally as a steam engine, a motorcar or a lawn mower wears out. I have had occasion to observe the gradual disintegration of a number of old men and have been struck by the fact that in most cases the symptoms are much the same. They grow hard of hearing and complain that people mumble; they are unsteady on their pins and find it convenient to walk with a stick; at noon, when they are reading, or after dinner, while they are smoking a cigar, they feel drowsy and fall asleep. They can remember, often in tedious detail, things that happened thirty years ago, but forget events that took place the week before last. But the worst trick memory plays on them is that they know what word they want to use, but for the life of them cannot remember it.

(訳) 私は死にかけている，と云っても明日，あるいは明後日，来週，来月または来年というのではない。ただし，いずれそのうちに死ぬとわかっているが。

存命中（これからさき）風邪が肺炎になり，無理がたたって心臓発作となるかも知れないし，あるいは自動車との正面衝突で即死することもあるかも知れない。

数年前私は偶然，ある保険会社の保険統計表を見つけた。その中に，ある年令の平均余命表があった。私は当時80才で，後5年9ケ月生きられることが分った。これを書いている時すでに5年3ケ月経過している。だから事故さえなければ後6ケ月生きられる。

通常の状態では，死はゆっくり，のろのろとやってくる。身体は一つの機械であって蒸気機関や自動車や芝刈機が損傷すると全様に自然にだめになる。私は幾人かの人が徐々に死んで行くのを見て来た。そして大抵の場合，その徴候が非常に似ているのに驚いている。

まず耳が遠くなる，そして人が何か口の中でぶつぶつ言っているとこぼす。足がおぼつかなくて，杖（つえ）をたよりにする。正午に読書している時，または食後煙草をふかしている時眠くなって，ついうとうと眠りこんでしまう。三十年前に起ったことを，しばしば，あきあきするほど，ことこまやかに覚えている。それでいて先々週の出来事をすっかり忘れる。しかし彼らに対する記憶の最も悪いいたずらは，どんな言葉を使いたいか分っていながら，どうしてもそれを想い出すことができないことだ。

（以下原文と対照せず，なお特に興味ある部分のみを述べることにする。）

彼らは，いらいらし勝ちである。そして，ささいな理由で急に烈火のごとく怒りだす。老人が我慢せねばならぬ感情の問題が他にもいろいろあると思うが，さしあ

たり思いだすことができない。老人を見て私の気づいたことを，いくつか指摘したが，自分もまたその例にもれないと悟って，いよいよ自分の観察が当っていると考えている。ただし，おかしいと笑いながら気味が悪い。

私の年令で，もっと長く生きられると考えるのは馬鹿げたことだろう。私は死を恐れない。そう言うのは易しい，―そしてそれは本当だ。だが死が間近に迫ったらどんなに感ずるだろうか，それは私にはわからない。

私がとても疲れて寝床につく時に，今寝込んで決して眼を覚まさないなら，どんなに愉快だろうと，ひとりごとを云う。―時々そう感ずるが，そんな風に感じたいものだ。

私が死んだときに，処理されるいろいろの事について私が手配したことを考えるのが好きだ。―私の書物が私のきめた通り売りさばかれるのを見るのが待ちきれない。そして私が五十年間に集めた絵や，私の所蔵の芸術品が競売される Sotheby's の光景を想像してみる。たくさんの人が集まらなかったら，また売られた品が大した金にならなかったら私はさぞがっかりするだろう。

私が愛着を感じ，また義理のある人々と，私が死んだら彼らはどうすべきか，どんな方針を立てたらよいか，談し合いたい。私は，あたかも旅に出かけるときのように平静に示唆したり，説明したり，助言したりすることができよう。しかし「死」のことを決して口に出すまいとする彼らの強い決意にさえぎられる。まるでそれを指摘しないことで，また彼らの考えからそのことを払いのけることで，また彼らの無関係のことのように取り扱うことで，「死」をまぬかれるとでも考えているようだ。

（妙なことだが，私が思うに，われわれは死ぬとわかっていながら，雨の中に傘を持たないで出て行けば必ずぬれるとわかっているほど，強く確実には「死」を意識しないことだ。）

（原文）(The odd fact is, I think, that though we know we shall die, we don't know it with the same force and conviction as we know that if we go out in the rain without an umbrella we shall get wet.)

(2) （この部分では自分の死後の死体処理，遺言などのことにふれ，そして葬式の前後の模様を想像して，彼独特の皮肉をちょっぴり風刺的に加えている。）

私が死んだら死体を火葬にすること，追悼会は行わないことを私は遺言書で指示した。そもそも追悼会というものは，現代の風習のうちで，いやなものの一つだ。故人が著名な人であるか国家にいちじるしい功労のあった人ならそれもよかろう。

そんな場合には，それは，それに相当する人への評価と尊敬の立派なしるしとなったであろう。しかし今では追悼会はその生涯が世に知られない，その活動が重要でなかった人々，つまり彼らの動きまわった少数のグループの人にのみ知らされている人々に対しても行われる。

故人の未亡人など生き残った人が追悼会を行う牧師と葬儀の費用など打ち合わせる。友人，知己宛に手紙が書かれその出席を依頼する。記録係が教会の戸口に着席して参列者が入って来るにつれてその氏名を書きとめる。Times（タイムズ）紙に死亡者の氏名が翌日掲載されるよう予約する。

そして，たまたま何かの理由で（例えば）ロンドン市内に居ない場合—それは，もっと重要な約束のためか，または無関心のためでもあろうか—参列できなかった人々は，それにもかかわらず自分たちの氏名が省かれないように気をくばるほど，現代社会は自己宣伝熱がさかんである。

教会に人が一杯集ったら，街路が案内された人々を運んだ車で塞がれたら，追悼会は一応成功だったと考えられるであろう。それは実際ちようどカクテル・パーティーなどの社交的集会みたいなものだ。その上費用は少なくて宣伝価値は，十分にある。それに引き続いて行われる午餐会は，また格別である。出席者は，から口のマルティーニをちびりちびり飲みながら，自分たちはまだ生きているので，ある種の安心感を感ぜざるを得ない。（つまり生きていてよかったとつくづく感ずることであろう）

Chapter 3

(1) 1870年代の後半，すなわちモームの効年時代父母と一緒に出かけたフランス北西部部 Deauville（海水浴場，避暑地）の思い出。Trouville（海水浴場）とフランス印象派画家 Eugène Boudin（1825—1898）のことなど。（Cf. The Summing Up 但し Eugène Boudin の名前などは，The Summing Up には出ていない。この部分は “Looking Back” の方が，はるかに詳しく述べてある。）

(2) 美しい母のこと。幼時，The fable of La Fontaine（ラ・フォンテーヌの寓話）を人前で recite（朗誦）させられたこと。母の親しい友人 Lady Anglesey に20フラン貨幣をもらい，それを何に使いたいかと尋ねられた時女優 Sarah Bernhardt を見に行きたいと答えたことなど。（Sarah Bernhardt（1845—1923）フランスの女優）

(原文) I was sent for to be shown off and recite the fable of La Fontaine which I had learned by heart. On my seventh birthday Lady Anglesey, who was my mother's most intimate friend, gave me a twenty frane piece and I was asked what I wanted to do with it. I said I wanted to go and see Sarah Bernhardt. How I could ever have had the idea I cannot imagine. Anyhow, on that night I was taken by my eldest brother to the theatre for the fist time in my life. The play was an atrocious melodrama; to me it was wonderfully thrilling.

(3) Lady Anglesey とその夫 Lord Anglesey との離婚のいきさつなど。

(4) 晩年の Lady Anglesey と母のこと。

Lady Anglesey が，かって「あなたはとても美しい。若いチャーミングな男たちが，ほれこんでいるというのに，なんであんな醜い小男に操をたてるんですか」と言った。すると母は微笑して「あのね，私たち結婚してから，ずっと，あの人，わたしの気持を傷つけたことがないんですもの」と答えたそうである。(この部分は The Summing Up の Chapter VII に引用されている)

Chapter 4

(1) 私の母は肺病であった。母の姉もこの病気で亡くなっていた。その当時医師たちは肺病にかかった女は赤ん坊を生むとよいという説をいだいていた。こんなわけで私の最年少の兄の生出後六年目に私が生れている。私がようやく七つになろうとする時，パリーで一冬を過した後（——このことは母の身体のためによかったのだが）医師たちは母がもう一人産んだらよいときめた。今度は子供は死んで生れたし，母も亡くなった。その後二年目に父が死んだ。(Cf. The Summing Up, Chapter VII) そして，私はうばに連れられて英国に行き私の伯父であり後見人である Whitstable の牧師に引き渡された。私はうばが好きだったので，彼女がそこに来てそれから別れることになった時は涙を流した。(Cf. Of Human Bondage, Chapter 3) (Of Human Bondage では，うばは英国に行かないことになっている)

(2) 伯父の無理解，伯母のとりなし，それから彼女のなぐさめの言葉など。

(3) Canterbury にある King's School の予備校にやられる。その時はちょうど十才であった。(Summing Up, Chapter XVIII. 参照) この頃 Waverley novels, Arabian nights, Alice in Wonderland, Through the Looking Glass などを読んでいた。伯父が彼を Canterbury の学校に連れて行って，校長が来るのを待っているとき，伯父に "Tell him I stammer, Uncle." と云った。しかし，

どもりが一生彼を苦しめることは，まだその頃までは気がついていなかった。

(3) その学校の教師は無理解だった。どもりのため同級生の笑いものになったのみならず，教師自身が彼のどもりにいらだち，ひどい仕打ちをしたこと。

ついに King's School を永久に去る。(Cf. The Summing Up, Chapter XVIII)

Chapter 5

(1) 南フランス滞在の第二年目の冬を過ごした後，英国の伯父の牧師館に帰る。その間に新に牧師館が建てられていて，立派になっていた。

牧師館の模様，そこに出入りする人々のこと，伯父，伯母の気質，伯母の嫁入り当時の持参品のことなど。

(2) King's School 退学後，ドイツに行きドイツ語の勉強をするよう伯母にすすめられる。伯父も許可してくれる。伯母はミュンヘン (Munich) の親戚の人に手紙を書き，彼が住みこめる家の推薦を依頼する。先方から Grabau 生れで，Heidelberg (ハイデルベルク) の，ある先生の妻である婦人を紹介してくれる。この家は幸い下宿屋を兼ねていて，評判もよく，おまけにその先生というのがドイツ語を教えてくれるとのこと。早速伯母がその人に手紙を書いてくれ，いよいよそこに行くことにきめる。(Cf. Of Human Bondage, Chapter 22)

(3) ドイツの下宿先の家族，同宿者のこと，その幾人かとの交友関係特に Cambridge 出身の Ellingham Brooks のこと。(Of Human Bondage, Chapter 26. 参照のこと，この中に出てくる Hayward は Ellingham Brooks をモデルにして書いたものと考えられる。)

(4) Ellingham Brooks の影響。この友人は文学愛好家であって文学に対する心を開いてくれた。(A Writer's Notebook の 1892年の部分にも Brooks という人物のことについて述べている)

(5) King's School のあのひどい教師がいなかったら自分は奨学金をもらい Cambridgeに進学し，特別研究員になり，フランス文学などに関するいくつかの面白くない学究的な書物を書いて，謹厳で平穏無事な生活に入ったであろうと述べている。

Chapter 6

(1) 私がドイツから，帰ると伯父は彼のオクスフォード時代の旧友で今は行政官として名を上げている人に手紙を書いて，その人のところに何か就職のチャンスはないかとたずねてやったがだめであった。それから伯父は Dixon という solicitor

（事務弁護士）に手紙を書いてくれた。この人は祖父の下で年期奉公の事務見習をした人であった。

私の祖父 Robert Maugham は，その名が The Dictionary of National Biography に載っているほど著名な法律家であった。そしてその当時それが普通であったのだが，たくさんの家族を持っていた，すなわち三人の娘と四人の息子がいた。伯父は一番年少で早くから聖職につくよう定められていた。そのために，他の子供たちが，クリスマスのパーティーに出かけたときも，未来の牧師として家に残された。このことが伯父を一生ふきげんにしたものと私は考える。

(2) ある程度の文通が行なわれた後，私は Dixon 氏に会いに行った。彼は私を昼食に連れて行った。そして祖父の思い出話など聞かせてくれた。結局 Dixon 氏は，私が Chancery Lane の，ある会計士の事務所で，二，三週間過ごして，その仕事が適しているかどうかやってみるよう手配したと話してくれた。ところがどうもその仕事は自分には向かなかった。

（私は Whitstable に帰った。伯父は私を見て浮かぬ顔をした。伯父は私を無能と考えた。実際私はそうだった。また伯父は私をなまけものと考えた。しかしこれは当っていなかった。）

（原文）(I returned to Whitstable. My uncle was none too pleased to see me. He thought me incompetent, which I was, and lazy, which I wasn't.)

最後に私を助けに来てくれたのは，土地の医師であった。この人が医師になってはどうかと云ってくれた。この考えは私の気に入った。まず London に住めることが最大の魅力であった。このようにして必要な試験にパスするために数週間詰め込み主義の教育を受けた後，十八才で St. Thomas's Hospital 附属医学校に医学生として入学した。

(3) われわれは，みな大体十八才ぐらいであった。但しカリキュラムの一部として Oxford あるいは Cambridge で二年間を過ごした人は別であって，彼らは自分たちを，大学に行かなかったわれわれより一段うわてのものと考えていた。私は仝僚の学生の性的体験の自慢話をじっと聞きながら，うぶなため，そのままそれを信じて，自分が童貞であることをむしろ恥ずかしく思った。（中略）

五年後医師の資格を得た。そしてまた小説 Liza of Lambeth を書き上げ，これがかなりの成功であった。いよいよ医師をやめて文筆生活に入ることを決心する。

Chapter 7

(1) (以下この節の要旨を述べることにする)

モームは着々と創作の筆を進め，二，三の小説を書き上げ短篇集を一冊出版した。彼の小説の一つである Mrs. Craddock (クラドック夫人) はかなり成功であった。“A Man of Honour” という劇が The Stage Society (演劇協会) により上演され，文学社会で多数の友人ができた。そして将来有望な作家として注目されるようになった。文学愛好の貴婦人たちが度々招待してくれた。Mrs. Wilberforce の夫である Westminster の Archdeacon (副監督) が彼の小説 “Liza of Lambeth” を引き合いに出して説教をしたというので彼の下宿の女主人は大喜びであったことなど。

(中　略)

いよいよ三十才というのに，型にはまって何のへんてつもないのに，いささか，あせりを感じてくる。友人の Walter Payne と相談して，アパートを引きはらい，家具をにそく三文に売りさばき，パリに行く。そこで Gerald Kelly (後に Royal Academy の President となった人) と旧交をあたためる。彼を通じてて新しい世界，すなわち芸術に没頭した人々の世界に入り，何物にも拘束されないのんきな bohemian life (自由奔放な生活) を送った。その夏は Capri (ナポリ湾の岩の多い美しい島) で過ごし，パリに行き，ここに，さらに数ケ月滞在後ロンドンに帰った。

Walter は彼より裕福で Pall Mall に部屋を借り，彼もまたその隣りの部屋を手に入れることができた。ここで “The Magician” (魔術師) を書いた。この小説は彼がパリで過ごした数ケ月の間に度々出会った一風変った男をモデルにしたものであるが，彼自身この小説を an indifferent book (よくも悪くもない平凡な作品) と呼んだことなど。

(2) (要旨) 彼がパリに行く前に交際した友人の中に Mrs. Stephens という夫人がいた。彼女は当時の文学や演劇の世界に出入りする人々を誰でもよく知っていた。そしてかって，Nelson が Emma Hamilton と同居していた Merton Abbey と呼ばれる邸宅を所有していた。彼女は夏の間を通じて，度々午後のパーティーを催して，彼女の友人たちを招いた。このパーティーで，たまたま，モームは非常に美しい若い女に出会った。金髪で青い眼の女，それは Renoire (フランスの印象派画家) の描いた，あの甘美な裸婦を想い出させるので，ただその絵の示す血色のよ

い赤らみと丸ぽちゃな美しさには幾分欠けてはいたが，美しい容姿の女だった。その最大の魅力は微笑であった。およそ人間の微笑で，これにまさるものはないほどであったと云っている。モームはその会合の後で，しばしば彼女に会った。彼女は女優になる積りでいた。そして既に結婚していたが，その結婚は不幸であった。ある晩料理店で食事をした後で，彼女を Pall Mall の自分の個室に連れて行った。辻馬車で彼女の住居に帰る途中，彼女は「私達の関係は，いつまで続くでしようか？」と尋ねた。これに対して彼は「六週間」と軽薄な返事をしたが，それは八年間も続いた。「彼女を Rosie と呼ぶことにしよう。」と云って，モームはこの話を結んでいる。(この Rosie と呼ばれる女がモームの "Cakes and Ale"（お菓子とビール）のモデルになった人で，同じ名前で，この小説に主役として登場する。)

Chapter 8

(1) (原文) When I look back on my long life I have the impression that pretty well everything that has happened to me has been occasioned by chance. I have had the curiosity to look out the word tn the Oxford English Dictionary. Among other definitions I found one that described it as "a matter which falls out or happens: a fortuitous event or occurrence; often, an unfortunate event, mishap, mischance." The word "often" is, I think, unduly pessimistic. In my recollection these fortuitous events, though sometimes disastrous, have more often been to my benefit.

(訳) (私の長い生涯をふりかえってみると，今まで私に起ったすべての事は偶然に起ったような気がする。私は偶然（Chance）という言葉を，好奇心から，Oxford English Dictionary で調べてみたいと考えた。辞書にのっている語義の中には「たまたま起ること；偶発的なこと，または（事件の）発生；しばしば不幸な出来事，災難，奇禍」と説明している。"often"（しばしば）という言葉は不当に悲観的であると私は考える。私の思い出においては，これら偶然の出来事は，時には災害を伴うものであるが，一層しばしば私の利益になってきた。)

モームは偶然が自分にむしろ幸いをもたらしたことを次の通り，いくつか列挙している。

(2) この節では短篇 "Rain" を書くにいたったいきさつを次の如く述べ，これを書く機会も全く偶然に自分に与えられたものであるとつけ加えている。

(原文) Of all my short stories, "Rain" is that which has become most widely known. I had gone to Honolulu with the intention of

taking a ship that would land me at Tahiti, I wanted to go there because I had long had the idea of writing a novel based on the life of Gauguin, of whom I had heard a great deal during the year 1905, which I spent in Paris, and I hoped to find in Tahiti matter that would be useful to me. For some reason which I have forgotten there was no ship to take me there and it appeared I could do nothing but wait for one that put in at Honolulu on the way to Mew Zealand and stopped to put off passengers at Pago Pago. There I could get a schooner that wauld take me on. When the ship I was waiting for arrived at Honolulu I booked my passage. The night before this the red district of Honolulu, called Iwelei, to the general excitement had been raided by the police. A few minutes before my ship sailed a young woman hurried on board. As we came to know later, she was a prostitute escaping from the law. The other passengers were a doctor and his wife and a missionary with his. When we arrived at Pago Pago, we learned that there was an epidemic of measles there, often a fatal disease among Kanakas, and telegraphic instructions had been received from Apia to say that the schooner, we-the missionaries, the doctor and his wife, and I-would not be allowed to enter the harbor till it was certain that no member of the crew was affected. We were obliged to stay at Pago Pago till further notice. The delay gave me the opportunity to write the story I wrote. It was given me by pure chance. (A Writer's Notebook の1916年の部参照)

(3) ここにも偶然が幸いをもたらした例を挙げている。すなわち彼の作品 "Before the Party" を書いたいきさつを述べているが詳細は省略する。

(4) Chance (偶然) が自分の文学活動に多大の影響があるとすれば，学者はそれについて，どんなことを云っているのか，しらべてみるのがよいのではないかと，ふと思いついた。私は早速ロンドン図書館から，C. D. Broad が書いた小冊子を取りよせることにした。その書名 "Determinism, Indeterminism and Libertarianism" により，この本はまさにその問題を論じていることが分ったので，それを読んでみた。その中の一節 "The Mind and Its Place in Nature" には大いに関心をもった。C. D. Broad は心の奥底では Determinism に傾いているように見受けられる，と彼は云っている。

(注, determinism (決定論) (人間の意志行為は何らかの原因によって規定，制約されるという説); indeterminism (非決定論); libertarianism (自由意志論)

(5) 自分が人気のある劇作家になったのも偶然であると云って，"Lady Frederick" が成功したいきさつを述べている。

(6) "Lady Frederick" の成功により，多くの友人が出来て，劇場支配人が従来拒絶した脚本も受け入れられ楽しく暮したことなど。

(7) (8) (9) (10) この四つの節では，当時 Cabinet Minister（閣僚）であった Winston Churchill との出会い，彼との親交，彼の人がら，逸話などについての思い出を語っている。モームの人物評は興味深いものである。

(11) Rosie は既に前夫と離婚していて，自分と結婚したがっていると考える。でも彼女が不身持なので彼女との結婚をその時は望まなかった。それは彼女がまるでみだらな女であるように聞こえるが，彼女に限ってそうではないと弁護している。（中略）とにかく自分も三十代の後半に入ったので，結婚するとすれば早い方がよいと考える。

(12) Walter Payne との同居生活を，そろそろやめようと思う。そうするには Rosie と結婚するに越したことはないと考えはじめる。別に彼女に恋しているわけけではなかったが，さしあたり，彼女以上に好きな人がいなかったのである。とにかく結婚する決心をした。

(13) Rosie がアメリカに渡ってシカゴで開演の新しい劇に，いい役割で登場することになっていた。そこで彼女と落ち合い，結婚を申込もうと決心する。英国出発前にエンゲージ・リング（engaegment ring）を買い求めた。

ニューヨークに到着したらすぐ波止場に彼女の乗っている船を迎えに行った。彼女は，さっそうとした一人の若者と楽しげに話していた。その男を自分はちらっと見た。彼女が一日もニューヨークに滞在できないと知って失望した。そこで出来ればシカゴに行って彼女の劇を見たいと彼女と打ち合わせをする。

(14) シカゴで Rosie と会って次のような会話が行われる。

（原文） I said, "Rosie, I've come to Chicago to ash you to marry me." She paused for a moment. "Have you?" she said. "What do you say to it?" I smiled. I was certain of her answer. She paused for what seemed to me quite a long time. Then, "I don't want to marry you," she said.

私はあっけに取られた。彼女は結婚したがっているとのみこれまでずっと考えていた。エンゲージ・リングをポケットから取りだして彼女に手渡した。彼女はそれをじっと見て「とても美しい」と云った。彼女はそれを私の手にもどした。

（このようにして彼女と別れたいきさつをモームは述でている）

(15) その後しばらくして英国に帰って Piccadilly を歩いていると，新聞売り子が持っている Evening Standard 紙のプラカードが目についた。大きな文字で

Actress Marries Earl's Son と書いてあった。その女優が誰であるか，すぐ分ったので新聞を買った。私の思った通りであった。その新聞は Rosie がシカゴで貴族の息子と結婚したことを私に知らせた。相手は私がニューヨークの波止場に彼女を迎えに行った時彼女と話していた例のさっそうとした若者であると推察した。と述べている。

晩年になって，モームは「数年前私は Times 紙の死亡記事に彼女の死が発表されたのを見た。彼女は七十才をずっと越していたにちがいない。私は今でも彼女のことを愛情をいだいて思いだす。彼女は私が今まで人間に見た最も美しい微笑を示した」とつくづく述懐している。

(16) この節は Cakes and Ale（お菓子とビール）に関係があるので，原文を二部に分けて記載し，訳文を添えることにする。

I was born to write. I took to writing as a newborn child takes to breathing. I wrote my first short stories while I was still in my teens, and while I was a medical student I filled notebooks with random jottings. It was only natural that sooner or later it should be borne in upon me that I could make use of Rosie as a character in a novel. I thought about it a great deal. The character was there, vivid in my mind, but I could not for the life of me construct anything in the way of a story in which the comely personage I could construct on my model might play a plausible part. I turned over various projects in my mind, but they did not satisfy me. It was not till fifteen years later that suddenly, out of the blue, coming I know not whence, a scheme presented itseif to me that exactly suited my requirements. It was like one of those jigsaw puzzles, once the rage, in which you have, to begin with, a confused jumble of pieces, but which finally you can sort out into a coherent picture. The novel I had in mind was quite clear and I sat down to write.

（訳） 私は書くために生れたようだ。つまり，生れたばかりの赤ん坊が呼吸するように自然に書きはじめた。私の最初の短篇の幾つかを十代で書いた。そして医学生時代にはノートに手当り次第にいろいろのことをメモ的に書きとめた。Rosie を小説の一人物として使用することが出来るかもしれないと，早晩確信するようになるのは極めて自然の成り行きであった。私はそれについて大いに考えた。その人物は―そこに，私の心の中に，あざやかに存在した。しかしモデルとして書き上げることの出来るその美しい人物が打ってつけの役割を演ずる物語という風に，作品を構成することは，どうしても出来なかった。私は心の中でいろいろ考案をめぐら

した。しかし，どれも満足できなかった。十五年後に，ようやく突然，だしぬけに私の要求にぴったり合った構想がどこからとも知れず私の心に浮かんできた。それは一時大流行だった（切り抜き）はめ絵のようであった。それは，はじめは一つ一つがごちゃまぜであるが最後には，　まとまった絵に組み立てることが出来る。さて私の心に描いた小説は非常にはっきりしていた。そしていよいよ腰をすえて書きはじめた。

（原文）I have never written with more ease and more pleasure. I called it "Cakes and Ale." Of all my books it is the one I like best. When it appeared the critics took me to task because they claimed I had drawn a portrait of Thomas Hardy. I saw him only once. I was dining with Lady St. Helier, who liked to mingle men of letters wilh lords and ladies. Hardy had been invited and when the women after dinner went upstairs while the men drank port and smoked cigars, I found myself sitting next to him. We chatted until it was time for us to join the ladies. I never saw him again and knew nothing of his life. In point of fact, the character the critics took for a portrait of Hardy was founded on a disreputable writer whom I had known at Whitstable when I was a ward of my Uncle Henry. An author should be credited with some invention. The character whom I called Edward Driffield was necessary for the story I had to tell and even though I had no model to draw from I would have created him.

（訳）　これ以上容易に，またこれ以上楽しく書いたことはない。私はそれを "Cakes and Ale" と呼ぶことにした。私の書物の中でこの本が一番好きである。この書物があらわれるや否や批評家たちは Thomas Hardy をモデルにしたと云って私をとがめた。私は彼には一度会っただけである。それは，文学者達を貴族や貴婦人達と交わらせることの好きな St. Helier 夫人と食事している時だった。たまたま Hardy が招待されていて，婦人達が食後二階に行き，一方男達はポートワインを飲んだり煙草をくゆらしたりしていた。ふと気がつくと私は彼の隣りに坐っていた。われわれが婦人達の仲間入りをするまで雑談した。その後彼に会ったこともないし，また彼の生涯については何も知らなかった。実際批評家たちは私が Hardy をモデルにしたと云うが，当の人物は，私が伯父ヘンリーの被保護者であった頃 Whitstable で知っていた評判のよくない作家であって，この人をモデルにして書いたものである。およそ作家なるものは或る程度の作り事は是認さるべきである。私が Edward Driffield と呼んだ人物は私が語らねばならぬ物語には必要であったし，たとえ私がモデルになる人物を持っていなくても，その人を作り出

したであろう。

(以上で Part Ⅰ は終っている)

Part Ⅱ

(The First World War and international intrigue are background for the author's bittersweet memories of a blithe romance, the birth of a daughter and the painful deterioration of a marriage.)

第二部は副題の示す通り，第一次大戦；国際的陰謀；などを背景とする作家モームの楽しいロマンスのほろにがい思い出，それから娘の出生，結婚の破たんなどについて語られている。

特に Mrs. Wellcome (後のモーム夫人—Christian name は Syrie) との出会い，彼女との恋愛，結婚，娘の出生，性格の不一致，離婚などについて極めて詳細に述べている。従ってこれはモームの作品，モームの女性観などを知る上に有力な参考資料となるであろう。

Part Ⅲ

(Concluding his memoirs, Maugham writes of his lack of religious faith, his friendship with Winston Churchill, the process of aging and reveals the "very imperfect, tormented creature" behind the urbanity of his life and works.)

回顧録を終るに当り，モームは彼の信仰の欠乏を告白し，Winston Churchill との交友関係などにもふれ，おおらかな彼の文筆生活の背後にひそむ不完全な，欠点の多い苦脳するモームその人を暴露している。

(第二部，第三部についてはその詳細を次の機会にゆづることにする。)

結びの言葉

モームの代表的な essays は，何と云っても The Summing Up; A Writer's Notebook であるが，Looking Back は彼の晩年の回顧録としてモーム研究に有力な資料を提供している点で注目に値いする。The Summing Up はモーム自身が云っているように，自叙伝でもなければ回顧録でもない。自分の関心を払ってきた問題について考え方を整理し自分の感情や意見に首尾一貫したものを与えるために書かれたものであり，この点 Looking Back とは大いに趣きを異にしている。

また Writer's Notebook は彼の心に浮んだ想念や考えや情感，あるいは日々の

生活や旅行中彼が見聞した興味深い人間や風物についての印象や心おぼえ，また明らかに彼が将来自分の創作に役立たせるつもりで控えておいたいろいろの挿話や体験などについてノートしたものである。そしてこれを将来の用に供する材料倉庫（a storehouse of materials for future use）と呼んだ。Looking Back の中には，本論でふれた通り，この Writer's Notebook に記載されたことが多少重複して述べてある箇所もあるが，飽くまで回顧録として筋を通している。そして人間的興味を中心に語られている。すなわち人間性の矛盾，弱点など，人間に関する観察，描写が多く，自然描写，詩的幻想などには欠けている。しかし文章は平易明快で読み易く談話的である。これと対照して試みに Aldous Huxley の essays をひもとけば，直ちに文明批評家としての論理的，知的な Huxley が，顔をのぞかせ，Lawrence の essays を読めば感受性の強い彼の人柄を強烈に示す巧みな文体に魅せられる。これらの作家に比べると，モームの文体は，ある時はあまりに平凡に感ぜられることもあるが，readable である。そこが彼の長所でもあろう。

次に参考のためモームの随筆を年次的に列挙し，Looking Back が彼の最後の随筆としての位置を占めていることを明示しておきたい。

（なお，本稿を終るに当り Looking Back, France at War など貴重な資料を貸与あるいは教示して下さった後藤武士先生に深甚の謝意を表明したい。）

W. S. Maugham's Essays

① My South Sea Island （南洋方面の旅行記）
Chicago〔出版社名なし〕, 1936（Daily Mail, 1922年1月に載った短い文章を著者の許可なしで印刷したもの）

② The Summing Up. London: Heinemann, 1937.

③ France at War. London: Heinemann. 1940.
（第二次大戦初期におけるフランスの状態に関するエッセイ）

④ Books and You. London: Heinemann, 1940.
Saturday Evening Post, 1939年2月－3月に連載。

⑤ Strictly Personal. London: Heinemann, 1942.
(N. Y. : Doubleday, 1941)
Saturday Evening Post, 1941年3－4月に Novelist's Flight from France の題で連載されたもの。（ドイツ軍侵入の際のフランス脱出手記）

⑥ Ten Novels and Their Authors London: Heinemann, 1954.

⑦ A Writer's Notebook. London: Heinemann, 1949.

⑧ The Writer's Point of View. Cambridge Univ. Press, 1951.
(National Book League 主催の文芸講演を収録した小冊子)

⑨ The Vagrant Mood. London: Heinemann, 1952.

⑩ Points of View. London: Heinemann, 1958.

⑪ Purely for My Pleasure. London: Heinemann, 1962.
(解説つき画集)
作者自身の収集した絵画集にエッセイ風の解説をつけたもの。

⑫ Looking Back N. Y.: Show, 1962.
(自伝的回顧録) (Show, The Magazine of the Arts, June, July and August, 1962)
アメリカの Show 誌, 1962年6－8月号に連載。(Maugham最後のエッセイ)

⑬ Selected Prefaces and Introductions. London: Heinemann, 1964.
主として自著への序文を収録してある。